

受験番号		氏 名		クラス		出席番号	
------	--	-----	--	-----	--	------	--

試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。

2014年度 第 1 回 全統マーク模試問題

国 語 (200点 80分)

2014年 5 月実施

注 意 事 項

- 1 解答用紙に、正しく記入・マークされていない場合は、採点できないことがあります。
- 2 この問題冊子は、43ページあります。問題は4問あり、第1問、第2問は「近代以降の文章」、第3問は「古文」、第4問は「漢文」の問題です。
- なお、大学が指定する特定分野のみを解答する場合でも、試験時間は80分です。
- 3 試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を高く挙げて監督者に知らせなさい。
- 4 解答は、解答用紙の解答欄にマークしなさい。例えば、

10

 と表示のある問いに対して③と解答する場合は、次の(例)のように解答番号10の解答欄の③にマークしなさい。

(例)

解答番号	解 答 欄
10	① ② ● ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨

- 5 問題冊子の余白等は適宜利用してよいが、どのページも切り離してはいけません。

問題を解く際には、「問題」冊子にも必ず自分の解答を記録し、試験終了後に配付される「学習の手引き」にそって自己採点し、再確認しなさい。



国

語

(
解答
番号

1

、

35

第1問 次の文章を読んで、後の問い(問1～6)に答えよ。(配点 50)

私たちは現在ごくふつうに読書をする。それどころか、読書を^(ア)シヨウレイされることも多い。小説を読むことにも特に抵抗はない。しかし、私たち大衆が読者になったのはそんなに昔のことではない。私たちが読者になるためには、多くの条件が整わなければならなかった。

第一は、印刷技術による書物の大量生産が可能になること。第二は、多くの人々が読み書きの能力を持つこと。第三は、学校教育によって知的な能力が平準化されること。第四は、特に国語教育と、隠れたカリキュラムと呼ばれる児童や生徒や学生の自主的な学習によって、感性が平準化されること。第五は、黙読ができる能力と空間(個室)を持つこと。第六は、これらの条件を備えた階層が大衆として成立すること。第七は、マスメディアの影響も受けて、特にその階層内では共同体意識が持てること。第八は、それでいて自分が独立した個人であるという意識を持てることである。少なくともこれら八つの条件があつてはじめて私たちは近代的な読者となったのだ。

日本で近代小説の読者が誕生したのは明治の四十年前後である。夏目漱石が登場し、自然主義文学が隆盛を極めた時期である。私たち近代小説の読者はほぼ百年の厚みを持っているのである。

先の八つの条件は中産階級を成立させる条件そのものだと言える。近代日本で中産階級が姿を見せはじめたのは明治の中期からだが、明治期にはその層はまだ薄かった。たとえば、明治三十年代の終わりの朝日新聞の発行部数は二十万部から三十万部にすぎない。現在の数百万部とは、文字通り二桁違うのである。現在の全国紙というイメージからはほど遠い。しかし、新聞を読むだけの教養があるこの時期の中産階級が、現在の大衆の原型であることはまちがいない。

大衆とは「みんなと同じがいい」という心性を持った人間のことである。さらに言えば、大衆とは「みんなよりほんのちょっとだけ上がいい」という心性を持った人間だろう。「みんなと同じがいい」という心性は大衆全体のレベルを引き上げ、「みんなよりほんのちょっとだけ上がいい」という心性は大衆の一部のレベルをさらに引き上げる。大衆にこのような心性がなければ、

資本主義は発展しなかっただろう。読書で教養を身につけることも、「ほんのちょっとだけ上」の一つに数えられるかもしれない。こうした意味での教養主義が出版文化の発展に果たした役割は少なくなかった。もちろん、教養だけが読書の目的ではないが、娯楽だけが読書の目的でもない。

こういう大衆が国民の大多数を占めるようになったのは戦後になってからで、一九六〇年代から一九七〇年代にかけて日本を劇的に近代化し、現代への道筋を切り開いた高度経済成長期である。^(イ)カクイツ的な工業製品を持つことが幸福の形だったこの時代、「みんなと同じがいい」という国民性は最高潮にあっただろう。そして、他の職種と比べた小説家の収入が最も多く、社会的なステータスが最も高かったのがこの時代だった。

繰り返すが、この時代にあつては小説を読むことは大衆の教養の一つだった。しかし、大衆の教養はそれまでのエリートの教養とは質が違っている。端的に言えば、読書がエリートの行為から大衆の行為へと広がりを持つようになり、読書が教養から消費に変わったのである。大衆の教養とは、いかにうまく上品に消費を行うかにあった。

私たちは旧時代の教養主義の崩壊という代償を払って、大衆消費社会の読者となったのである。もちろん、それは善し悪しの問題ではない。歴史の推移の必然だったと言いたいだけだ。そして、いま私たち読者はかつての教養主義時代の読者とは違って、分厚い層をなした消費者として、書き手に自分たちを意識させるだけの権力と政治力を持ったのだ。教養を持った人間だけが権力に近づくことができる社会と、大衆が権力を持った社会とどちらがいいか、これも善し悪しの問題ではないだろう。^A歴史の必然だったのである。

活字文化が市民社会の形成に大きく寄与したことは、宮下志朗『本を読むデモクラシー』に詳しい。「一言語、一民族」というフィクションによって成り立つ国民国家という「想像の共同体」形成に活字メディアが寄与したことは、ベネディクト・アンダーソン『定本 想像の共同体』によって定説となっている。

アンダーソンの言う「想像の政治共同体Ⅱ国民」は、「イメージとして心の中に」想像されたものであり、「限られたものとして想像」（国境が国家を区切っている）されたものであり、「主権的なものとして想像」（近代の国民国家は自由を前提とし

ている)されたものであり、「一つの共同体として想像」(平等が前提とされている)されたものである。

ここで、**B** 政治体制と近代読者との関係について考えておこう。政治体制と近代読者との歴史的な関係について、ヒリス・ミラーは次のようにまとめている。(注2)

西洋の文学は、一般的には印刷書物の時代と、新聞、雑誌、定期刊行物のようなその他の印刷物の時代に属しており、西洋全域における読み書き^{リテラシー}の能力の漸進的な向上と関係が深い。読み書きの能力の普及がなければ文学は存在しない。さらに、読み書きの能力は、十七世紀以降の西洋型民主主義の緩やかな出現と切り離しては考えられない。これは参政権の拡大、議会政治、司法制度の整備、そして基本的人権あるいは市民的自由の権利を備えた統治形態を意味する。そのような民主主義が、程度の差はあれ、万人教育を^(ウ)ジョジョに発展させたのである。

もちろん、ヒリス・ミラーは「印刷機がフランス革命やアメリカ革命のような民主主義的な革命を可能にした」ことを確認しているし、現代ではインターネットが同様の役割を担っていることも確認している。そのうえで、「西洋型民主主義」がもたらした「読み書きの能力」と文学とは切っても切れない深い縁があると言っているのだ。

では、近代文学とはどのような文学なのか。ヒリス・ミラーの答えはごくシンプルである。そしてシンプルであるがゆえに、厳しい現実を浮かび上がらせる。

近代民主主義の台頭は、各国市民に民族的・言語的統一感を抱かせる近代国民国家^{ネーション・ステート}の発生を意味した。近代文学とは自国語による文学のことである。それは共通語^{リンガ・フランカ}としてのラテン語の使用が姿を消すにつれて現れ始めた。国民国家と手に手を携えて進んできたのが、国民文学、すなわち特定の国の言語と慣用語で書かれた文学という^(エ)ガイネンである。

このことの意味は、「西洋型民主主義」の「外部」に出てみなければわからない。

C 現代アラブ文学研究者の岡真理は、こう言っている。アラブ世界では作家もいて小説も書かれているのに、小説がほとんど読まれていないのを不思議に思った岡真理の恩師がアラブ世界に行って「どうして小説を読まないのか」と問いかけたところ、「人間のことであれ、世界のことであれ、真実はすべてクルアーン（イスラムの聖典コーラン）に書かれているので、被造物の人間が書いたもので真実を知る必要はない」という答えが返ってきたと言う。

岡真理は「どうして小説を読まないのか」という問い自体が、「西洋型民主主義」の国に住む人間のエスノセントリズム（自民族中心主義）から発せられたものだったと言う。なぜなら、私たちにとっては「書いたテキストが小説本となって流通して読者の手に届くことを可能にする条件」が、改めて問う必要がないくらい「透明な存在」になっているからだ。しかし、アラブ世界ではそのような「条件」はなかった。あるいは、そのような「条件」は決して「透明な存在」ではなかった。

「西洋型民主主義」の国に住む私たち日本人は、私たち日本人がどのようにして近代読者になったのかを忘れているか、よく知らない。だから、「近代文学とは自国語による文学のことである」というシンプルな命題にさえ気づかずにいる。歴史を学ぶか、さもなければ「外部」に出てみることは、知的な思考には欠かせない要素である。

考えたいのは、こうして誕生した読者がどのように小説と関わり、いわば「内面の共同体」をどのように形成するのかということだ。

デイヴィッド・リースマンというアメリカの社会学者は、大衆は他人指向型の人間だと言っている。それは、近代になってから絶対的な規範だった神が死を宣告され、緩やかな規範だった共同体が崩壊して、個人が孤立化し断片化したために、他人を真^ま似^ねることによってしか生きるシ^シン^ン（^オシン）を持つてなくなったからだと言うのだ。しかし、近代的な個人は他人の外側だけを真似るのだろうか。そうではないだろう。内面が理解できると確信するから他人を真似るのだろう。そして、こうした内面の共同性を人々に教える最もすぐれた教科書が小説だったのである。

小説の読者は「ここにも自分がいる」と感じたに違いない。そして、「あの人も自分と同じように読んでいるだろう」と感じ

ているに違いない。その上で、「自分はちょっと違う読み方もしているし、違う読み方ができる」という感覚を自己のアイデンティティーのよりどころとするのが大衆だ。それが近代小説の読者である。

(注3)
フーコー流に言えば、主体を確立することは権力を内面化することにはかならない。たとえば、日常生活に張り巡らされた権力の網の目を小説が掬い取って、近代読者はそれを自己の内面の鏡として主体化して、アイデンティティーを確立するわけだ。そのようにして、国民が生まれる。国民とは目には見えない国境を内面化した人間のことだからである。この見えない国境こそが、内面の共同体なのだ。

他のメディアにもこのような働きはある。しかし、黙読を前提とする近代小説はこの働きの最も効率のいい実践者だった。なぜなら、近代小説は人間の内面を書くことを主な仕事としてきたのに、黙読する読者は他人と自分を比較できないからである。他人の内面がわからないからこそ、黙読しているいまの自分の内面が他人の内面と同じだという、いわば内面の共同体を形成してしまう逆説が生じたのである。

その内面の共同体はある一定の方向が与えられている。それが国語教育である。小説をある一定の読み方で読むことが、国語教育という制度によって強制されてきた。この場合のある一定の読み方とは、大人に成長することが人間の価値だとし、他人との共生を志向する道徳的な読み方のことである。**D**小説は国語教育に取り込まれることによって、国民的な教育装置となった。

(石原千秋『読者はどこにいるのか』による)

(注) 1 ベネディクト・アンダーソン——アメリカの政治学者(一九三六～)。

2 ヒリス・ミラー——アメリカの文芸評論家(一九二八～)。

3 フーコー——フランスの哲学者(一九二六～一九八四)。

問1 傍線部(ア)～(オ)に相当する漢字を含むものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は

1
5

(ア)

シヨウレイ

1

- ① コウシヨウな趣味を持つ
- ② オリンピックをシヨウチする
- ③ 会社でシヨウシンが決まる
- ④ 芸道にシヨウジンする
- ⑤ シヨウガク金を受け取る

(イ)

カクイツ

2

- ① 設備をカクジュウする
- ② 舞台裏でカクサクする
- ③ 事件のリンクカクが見えてくる
- ④ カクチョウの高い芸術作品
- ⑤ トウカクを現わす

(ウ)

ジヨジヨ

3

- ① 友人をエンジヨする
- ② チツジヨを整える
- ③ ギリシャのジヨジ詩を読む
- ④ ジヨコウ運転をする
- ⑤ 税金をコウジヨする

(エ)

ガイネン

4

- ① ガイトウ演説を行う
- ② 天気のカイキヨウを伝える
- ③ シヨウガイを賭して守り抜く
- ④ 政治の腐敗をガイタンする
- ⑤ トウガイ事項の確認をする

(オ)

シンシン

5

- ① シンヨウ樹の森に入る
- ② スポーツをシンコウする
- ③ 意向をダシンする
- ④ 自宅でキンシンする
- ⑤ ザンシンな作品を創る

問2 傍線部A「歴史の必然だった」とあるが、どういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちか

ら一つ選べ。解答番号は 6。

- ① 教養を持った一部のエリートが支配階層として社会の中枢を占めた状態から、幅広い大衆の存在が社会に大きな影響力を持つように変化したのは、時代の流れに沿うものだという事。
- ② 教養を身につけるために必要不可欠だとされていた読書が軽視されるようになったのは、高度経済成長期において、日本人の価値観が大きく変化したことの必然的な結果だったということ。
- ③ かつて大衆は読書を通して教養を得ることで権力に近づこうとしたが、大衆の多くが高い教養を身につけた現代では、大衆が権力の中心を担うのは当然だと考えられるようになったということ。
- ④ エリートが教養を身につけるためのものとしてあった読書は、現在では大衆が娯楽として消費するものへと墮落してしまっただが、それも歴史の推移としてやむを得ないということ。
- ⑤ 明治期の中産階級も現在の大衆も同質の教養を求めているが、資本主義の発展にともなって、権力との関わり方に質的な違いが生まれたのは誰の眼にも明らかだということ。

問3 傍線部B「政治体制と近代読者との関係」とあるが、その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ

選べ。解答番号は 7。

- ① 近代の民主主義社会では、印刷された書物が一般に流布するのにもなって、人々の間に自ずと読み書きの能力が普及し、自由な市民としての国民が近代文学を楽しむようになった。
- ② 近代民主主義の台頭は、読み書きの能力を有する国民が、自国語で書かれた文学を読み、程度の差はあるものの民主主義の精神を理解できるようになったことに起因している。
- ③ 西洋の民主主義国家では、国民は政治に参加し国家を担う市民になるための教育の一環として読み書きを習い、自国の文学を享受するとともにそれを西洋全域に広めようとした。
- ④ 近代の民主主義国家では、民族や言語における国民の一体感が不可欠だが、その一体感は、教育により普及した読み書きの能力を背景とする自国語の文学の広がりに対応していた。
- ⑤ 西洋の民主主義体制は、議会政治や司法制度の整備などよりもむしろ、印刷技術の発達と人々の読み書きの能力の向上によって生まれた近代国民文学によって支えられていた。

問4

傍線部C「現代アラブ文学研究者の岡真理は、こう言っている。」とあるが、ここで筆者が岡真理の言葉を取り上げたのはどうしてか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 8。

- ① アラブ世界のように作家はいても小説の書かれない社会の存在を知らせることで、小説本が出版される条件に恵まれ、作家が多くの収入を得ている現在の日本の状況を考え直すため。
- ② 西洋型民主主義の思想を取り入れるとともに、経済的な発展を追い求めてきた日本人は、西洋以外の社会を考察の対象としてこなかったが、そうしたあり方への反省を促すため。
- ③ 人間の書いたものの中に真実はないとするアラブ世界の考え方を紹介することで、西洋の人間中心主義的な考え方を受け入れている現在の日本人のあり方を相対化するため。
- ④ 現在の日本では、読書が勧められ、人々が小説を読むことは自明なこととされているが、そうしたあり方は西洋近代の影響下で歴史的に形成されたものであることを明らかにするため。
- ⑤ 戦後、資本主義社会の中で経済発展を重視してきた現在の日本人に対して、アラブ世界の現実を伝えることで、民族中心主義を抜け出し柔軟に思考することの大切さを教えるため。

問5

傍線部D「小説は国語教育に取り込まれることによって、国民的な教育装置となった。」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 9。

- ① 近代小説は、人々に国民意識を植えつけるための唯一のメディアであったが、学校で一定の道徳的な読み方を強制的に教えられた結果、国家にとって望ましい国民意識をもった国民が養成されたということ。
- ② 人々の日常生活における道徳的な精神を描くことを主としていた近代小説は、教育の現場でその読み方が教えられるようになったことで、国民の間に共通する倫理観や共生の精神が自然に芽生えていったということ。
- ③ 近代小説は、そもそも自由で教養のある市民としての国民を育てるものであったはずなのに、国語教育に利用されたことで、必ずしも実態の伴わない国民国家という意識や国民に共通する内面を教える道具になったということ。
- ④ 近代小説は、国家権力の意向を汲み取って書かれ、一定方向での読み方が学校で教育されていたので、国民は自由な読み方をすることが許されず、次第に人々の精神を規定するものとして機能するようになったということ。
- ⑤ 人間の内面を描くことの多い近代小説は、読者に内面の共同性を教える働きをもつが、社会の求める人間を指すような読み方が学校で教えられることで、国民の内面が標準化され、国民意識が強化されていったということ。

問 6

この文章の論の展開に関する説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 解答番号は

10。

① まず、大衆が小説の読者となる条件を挙げ、教養としての読書について考察している。つぎに、そうした条件を整備したのが近代国家であることを、さまざまな例を示しながら説明する。最後に、近代小説が成立した当時の様子を振り返りながら、あるべき読者の姿を模索している。

② まず、小説を読むことを当然視している現在の日本の問題点を指摘している。つぎに、その原因が西洋型民主主義を安易に取り入れた近代日本社会にあることを述べている。最後に、現在の日本人が西洋型社会の外部に出ることや、小説のあり方について問い直すことの必要性を強調している。

③ まず、近代的な読者が誕生する条件や読者のあり方の変容を明らかにしている。つぎに、先人の研究や学説を引きながら、西洋型民主主義と文学との深い関わりを説明する。最後に、小説の読者としてのありようを顧みることの重要性を述べ、小説と国家の関係を論じている。

④ まず、日本の近代と現代における大衆や読書のあり方の相違点を説明している。つぎに、近代的な読者が生み出された経緯を、複数の学者の考察を踏まえて解説する。最後に、小説が国語教育に取り込まれていった近代日本特有の事情を欧米社会と比較しながら客観的に分析している。

⑤ まず、近代において教養を身につけるものであった読書が単なる消費に墮したことを指摘している。つぎに、近代的な読者が生まれた背景を多方面から検証する。最後に、読書を単なる消費財にしてしまった現代人は、近代人のような道徳的な読み方を取り戻すべきだと訴えている。

（下書き用紙）

国語の試験問題は次に続く。

第2問 次の文章は、高井有一たかい ゆういちの小説「遠い日の海」の一節である。これを読んで、後の問い（問1～6）に答えよ。なお、本文の上の数字は行数を示す。（配点 50）

昔、祖父は肥ふとっていた。縁側に坐すわって煙草を喫すう祖父に抱かれ、脂やにの匂いと、存分に陽を吸った丹前の匂いと共に包まれたのは、なつかしい記憶である。

「朝鮮のお話をして」

と幼い静吾がせがむ。

「またお話か。お話はもう種切れだよ」

と祖父は笑って首を振ってみせる。しかし静吾は、祖父がそうしながら、頭の中にいくつも蔵しまわれたお話の、どれを取り出そうかと考えているのを知っている。直じきに、あの長い煙管きせるをぽんと縁側の端に打ちつけて灰を落し、それからお話が始まるだろう。

「昔むかし、朝鮮の或あるところに、たいへん親孝行な人がいた」

静吾の頭の上を、和んだ声が流れて行く。その声は、祖父が衰え、全く変ってしまった今でも耳に親しい。

彼の祖父、榎枝浩一郎が朝鮮で過したのは、大正十四年から昭和十年へかけての十一年間である。格別に世に時めいた人ではない。総督府の厚生行政を受持つ部署いっかくの一劃に席を得ていたに過ぎないが、植民地の生活には、国家の目的がそのまま自分の生き甲斐となる快さがあつたのであろう。退職して東京へ戻った彼は、退職金と朝鮮で貯めた金を合せて、深川に六軒の貸家建て、気儘きままな隠居暮らしを始めた。静吾が朝鮮のお話をせがんだのは、主にこの頃である。しかし、閑しずかな時間は短かった。内地へ還かへって二年目に連つれ合あいを失い、次いで三年後、静吾の父が長く患った末に死んだ。間もなく始つた戦争の間、彼は静吾母子を護まもらなくてはならぬ位置に立たされたと言つていい。父の三回忌の法要の日、静吾は墓前で読経を終えた寺の住職に向つて、

「お経さえ読んでやれば、誰でも成仏ぶつするのかね。年寄を遺のこして勝手に死しんじまうような男でも、成仏するのかね」

と言つた祖父を見ている。

A 彼は祖父の執拗しつようにかき口説くような口調に愕おどろいた。

20 深川の貸家が焼けた日、静吾は学童疎開に参加して北陸にいた。罹災からほぼ半月経って、母から来た葉書の文面は、常のようではなかった。

焼夷弾で燃上る火の色を、あなたはまだ知らないのね。九日の晩は、それが凄（すこ）いほどきれいでした。ずっと遠くなのに、今にも火の粉が降って来そうな気がしました。それが深川の家が燃える火だったのです。貸家に住んでいた人たちが特別に可哀そうだったわけではありません。私たちこそ、何もかもすっかり失（な）くしてしまったのよ。あなたも、今までとはまるで境遇が変ってしまったのだから、それなりの覚悟をしてくれなくてはいいけませんよ。

B

25 この甲走（かんばし）った言葉に包まれた意味を、静吾は直ぐには理解出来なかった。彼が思い泛（うか）べたのは、昔、絵本で見た山火事の火の色である。戦争が終り、静吾が東京へ戻った十一月、母は既に勤めていた。父のもとの同僚の（ア）伝（つ）手で、神田の病院の会計係に就職したのである。病院の周りはすべて焼けていて、事務室は終日風に吹きさらされて落着かない、と長火鉢に埋めた僅かの火に、凍えた指先を揉（も）みほぐしながら母は言った。静吾は、日の暮れ際に帰って、着替もせず、彼や祖父に声をかけるでもなく、あわただしく夕食を調える疲れた母の不機嫌を怖れていた。月末の帳簿や伝票の整理で遅くなる日には、母は朝出る前に食事をこしらえて行くのだが、祖父は、母が帰るまで箸をつけようとしなない。

「お前、一人でおあがり」

30 と静吾を先に食べさせ、自分は敷き放しの牀（とこ）に（イ）疎（すく）むように凝（じつ）と坐（すわ）って、闇の落ちた戸外を眺めている。座敷から庭の植込を越して、隣家の窓が見える。都心に衣料品の店を出しているというその家は豊かで、客の訪（し）れも繁（しげ）かった。座敷から見える窓は客間らしく、度重なる停電の夜にも、いくつものランプの灯が明あかと点（つ）き、酔（よ）って歌う声までが洩（も）れ聞えた。

「ああいう人たちの世の中ね、これからは」

と、豆粕（まめかす）入りの飯（い）に鰯（いわし）の丸干を添えただけの、十分もあれば済んでしまう夕食が並んだ膳を見て、母は言った事がある。

40

「あぶく銭が儲^{もつ}つて、いくらでも贅^{ぜい}沢が出来るんだらうから」
祖父は合^{あい}槌^{づち}も打たず、冷めた茶を啜^{すす}っていた。配給の酒を飲まずに他所^{よそ}へ廻^{まわ}して得る金が、祖父の小遣^{こづかい}であったが、それすら大半は母に差出していたようである。

45

年が明けて間もない、雪もよいの、冷える日であったと思う。たまたま隣家の勝手口の前を通りかかった静吾は、そこに炭俵^{わらくず}がうずたかく積み上げられてあるのに気がついた。藁屑^{わらくず}が周囲に散乱しているのは、運ばれて来たばかりなのであろう。静吾の足が、殆ど意志とかわりなく、その方に向いた。彼は固く緊^{しま}った俵の横腹に穴を穿^{うが}ち、中の炭を把^{つか}み出した。触れると表皮が剥^はれ落ちる大ぶりの櫓炭^{なろ}である。服が汚れるのを厭^{いと}わず、腕一杯に炭を抱え、家の内に人の気配がしないのを確かめると、彼は走った。夕方の水のような空気が頬を打ち、不自由な腕の中で炭が軋^{きし}み、時にこぼれ落ちた。息を弾ませ、ようやく近所の空地まで辿りついて、彼は、枯草の打ち重なる片隅に炭を投げ棄てた。白い草に散った炭は、彼が予想したよりも、遙かに僅かの量でしかなかった。でもこれでいい、と彼は思った。ほんの僅かでも、あいつ等の炭を減らしてやれたんだ。かつては自分のものでもあった物質の豊かさを、それが失われた時になって、他人が誇示するのを、彼は許せなかった。盗んだ炭を抱いて走る姿は、滑稽であり、醜^{みにく}く、惨めでもあるのに違いないが、それでも構わない、日頃何一つ母にしてやれぬ自分にとって、これだけが出る唯一つの事なのだから、と考え、彼は苦みの濃い満足を味わった。しかし、家へ戻って母の顔を見るなり、彼の裡^{うち}に萌^もした痛みは、掌^{てのひら}から容易に去らぬ乾いた炭の感触とともに、長く遺され、彼は、再び同じ事を繰返す気にはなれなかった。

50

二月、金融緊急措置令による新円の切替えが行われたあと、静吾の家の窮迫は深まった。

55

母は、祖父と相談して、納戸代りに使っていた北側の四畳半を、人に貸す事に決めた。幾人か紹介された借り手のうちから、母が下^{しも}嶽^{だけ}安芸子^{あきこ}を選んだのは、母と同じ病院の薬局に勤めているのと同時に、彼女が貧しかったからでもある。派手な人と一緒に住めない、と母は言った。自分たちの生活を見下げられるのは耐えられないと考えたのであろう。

安芸子が来た日は、朝から雲が低く、夕刻になって雪が落ち始めた。殆ど連夜の停電のため、蠟燭^{ろうそく}の乏しい光がゆらめく座敷に坐って、安芸子は寒そうに、かじかんだ手に息を吐きかけた。左右等分に分けて長く流した癖のない髪が頬に翳^{かげ}を作り、言葉

60

少く話^{すく}す唇は乾いて荒れていた。北向きの短冊窓を雪の影がしきりに走り、戸外の音はことごとく雪に吸われていた。静吾はその時、微かな心躍りを覚えた記憶がある。若い女がこれから共に住むという事が、鬱陶しい家庭にささやかな灯を点したように感じられた。

安芸子は台所の隅に僅かな煮焚きの道具を置き、一人の食事を調える。気まづくならないようにとの心遣いから、安芸子自身が望んでそうしたのであったが、静吾は、安芸子が夜勤で遅くなる日、母が夕食の菜を割いて、そつと安芸子の机にのせておいてやるのを知っている。

65

勝手口に枝を張る無花果^{いちじく}の蔭の石畳に七輪を持出して、安芸子は炊事をする。火つきの悪い代用炭の紫の煙が、無花果の枝に纏わりつつ立ち昇る傍に静吾も跼んで、たわいもない話をし、安芸子と少しずつ親しくなつて行つた。

「この間、面白かったわ」

70

安芸子は眼を細める。もう辺りは暮れなずんで、軒下の隅ずみには闇が淀み、七輪の火が安芸子の顔を明るませる。「病院の門の前に人だかりがして、騒いでるのよ。どうしたのかと思つたら、そこにイーゼルを立てて焼跡の写生をしてた絵描きさんがいてね、その人が、お婆さんに罵られてるの。お前さん、あたし等が焼け出されて、こんな惨めな暮しをしてるのを絵なんかにして、面白いのかい、他人の不幸で金を儲けて、寝覚が悪いとも思わないのかいって、それは大変な(ウ)剣幕。涙までこぼしたようだったわ。絵描きさんは一言も言わなかった」

鍋がふきこぼれた。蓋をずらして見る中に、皮のままのじゃが薯^{いも}が三つ踊っていた。

75

「家族の人が来て、お婆さんを連れて帰つてからも、絵描きさんは、イーゼルを片づけるでもなし、また絵を描くのもなし、ただ腕組みをして凝としてたわ。何だか淋しそうでね、あたし、気の毒になつて声をかけてみたの。そしたら、その絵描きさんも焼け出されたんだって。奥さんや子供を疎開先の田舎に遣したまま親戚の家に厄介になつて、東京のあちこちを描いているんだって。焼跡が好きじゃなけい、家がみんな焼払われて、地球が裸になつたみたい焼跡を見ると、自分もすっかり裸になつてしまったのを思い知らされてやりきれない。けども、その焼跡に人が生きて動いているのには、いとおしいというのか、

しみじみした気持ちにさせるものがあって、それで眼が離せないんだって言ってたわ。本当は、絵を描く暇があれば、職探しに歩かなくてはいけない身分なんだそうですけどね。いとおしいって言われれば、確かにそうね。あたしだって、他人が見れば同じようなものでしょうね、きっと。哀れなものなんだな、みんな、あたしたち」

疎開地からの列車が東京へ着いた時、静吾は焼跡を見た。陽の沈もうとする頃であつた。燃え蕩けるような落日が、灰色にわだかまる雲を鈍い朱に染める地平線にまで拡がり、焼けただれたビルの奥には、既に濃い闇が充ちていた。空の高みを旋回しつつ飛ぶ黒い鳥の群があり、その緩やかな輪の動きのうちから、一羽がと離れたと見る間に、ほぼ垂直の線を曳いて、人影のない焼跡に舞い降りた。直ぐに別の一羽が続き、更にもう一羽が続いた。車窓から束の間に見たに過ぎないこの光景を、静吾は忘れない。焼け果てて留処もなく広い荒くれた土地に、激しく鳥が舞い降りるさまが、不思議な感動を呼び醒めた。この何にも無い所から為体の知れない未来が始る、と彼は半ば怯えて考えた。その未来に待つているものは何だろう。彼は、母が罹災を告げる手紙に書いて来た「覚悟」という言葉の意味を、初めて理解したように思った。覚悟とは、この焼跡に裸で投出されている自分から決して眼を背けない勁さの事ではないのか。列車が駅の構内へ入るまで、彼は窓に倚つて動かなかつた。安芸子の話の画家は、炊煙の立つ焼跡に、自らの未来を見ていたのだろうか。

「さあ、いいかな」

やがて、鍋のじゃが薯を突ついてみて、安芸子が言った。

「少し早いけど、食べてしまおう。お腹が空いたわ。じゃあ、お先に」

七輪の残り火に薬罐をかけて、安芸子は部屋へ戻った。彼女は、決して他人を部屋へ呼ぼうとはしない。あとに遺された静吾は、火に手をかざして、しばらく安芸子の声の余韻を愉しんだ。風の立てる葉のさやぎに似た声は耳に快く、
D 例え、いとおしい」といった言葉の物柔かな響きを、彼は口の中で繰返して、羞恥の入り混った気の弾みを味わった。

若しかすると、祖父も同じような経験をしていたかも知れない。安芸子の休みの日、祖父はよく、躑躑がちに茶に誘った。時には、小一時間も笑いを交えた話が続く。また時には、安芸子が祖父の肩を揉んでやる。母は潔癖にそれを嫌ったが、口にはし

なかった。言え、祖父の楽しみを取上げてしまう結果になると知っていたからであろう。安芸子が来たために、静吾が期待した通り、家にはいささかながら霑うるわいと華やきとが加わっていた。

問1 傍線部(ア)～(ウ)の本文中における意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。

解答番号は 11 13。

(ア) 伝手で

11

- ① ことづけを頼んで
- ② 手づるによって
- ③ 話のついでに
- ④ 要請を受けて
- ⑤ 世話好きのせいで

(イ)

竦むように凝と

12

- ① もの思いにふけるようにして
- ② 強張^{こわば}ったように動かず
- ③ 頑^{かた}なに心を閉ざし
- ④ 心配のあまり黙って
- ⑤ 咎^{とが}められたように恐縮し

(ウ)

剣幕

13

- ① 涙ぐむほどの哀訴
- ② 集中攻撃の凄まじさ^{すさ}
- ③ 怒って昂奮^{こうふん}した態度
- ④ 反論できないほどの勢い
- ⑤ 意地の悪い振る舞い

問2 傍線部A「彼は祖父の執拗にかき口説くような口調に愕いた。」とあるが、この場面での「祖父」の様子についての説明

として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 14。

① 自分を取り囲む状況の大きな変化によって、穏やかだったはずの暮らしを失い、辛い状況へと追いこまれてしまった我が身の嘆きや失意が、妻子を遺して死んでしまった息子の法要の場において、うらみがましい言葉となつて溢れ出ている。

② 引退後の生活を楽しもうと貸家を建てて賃貸収入の道まで確保しておいたのに、その貸家ばかりか妻や息子までも戦争で失うことになり、そうした我が身に生じた悲劇を子どもに先立たれる親の不幸に仮託して周囲に訴えかけている。

③ 親孝行を主題とした民話が好きだったこともあり、引退後には息子に孝養を尽くしてもらいたいと願っていたが、その息子が自分よりも先に死んでしまい、その衝撃のあまり寺の住職を前にして理不尽な恨み言や愚痴が出てしまっている。

④ 戦争へと傾斜する時代状況のなかで、頼みの貸家が焼失したり長年連れ添った妻に先立たれたり、悲しい出来事に心安まる暇もないが、なかでも息子の死だけは何年経っても忘れられないものになるだろうということを確信している。

⑤ 戦時下において、職を辞した自分がなんの頼りもないまま孫と嫁を扶養していかねばならないことに不安を覚えるなか、我が子の法要の日を迎え、息子を亡くした喪失感を埋めるためにも息子の成仏を願わずにはいられなくなっている。

問3

傍線部B「この甲走った言葉に包まれた意味を、静吾は直ぐには理解出来なかった。」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

15。

① 一見すると身勝手なものに思える母の言葉も、実は悲劇的な状況においてこそ人間の勁さが試されているということ
を教えるものであり、そこにはひ弱な自分を励まそうとする優しさも込められていたが、静吾はそうしたことに気づか
なかったということ。

② 後になってから、母の感情的な物言いのなかには、悲惨な現実から眼を背けず一人ひとりが前向きに生きて行くべき
だとする気概が込められていたのではないかと受けとめるようになったが、手紙をもらった直後の静吾には、そうした
ことは考えられなかったということ。

③ 母の言葉は、自分たちを取り巻く過酷な現実を受けとめ、自分たちの境遇が変わってしまったことを覚悟して生きて
いかなければならないということを伝えようとするものだったが、手紙を読んだ静吾は、そうした母の言葉に反発を覚
えてしまったということ。

④ 後になって、母の言葉は、当時まだ幼かった静吾のことを考慮し、わかりやすく自分たちの置かれている状況を伝え
ようとしたものだったと理解するようになったが、手紙を読んだときの静吾には、母の言葉の尋常ならざる雰囲気しか
感じられなかったということ。

⑤ 母の言葉は、突拍子のないものに見えたものの、その裏にはこれから一家を背負っていかなければならないとする彼
女の覚悟が潜んでいたが、手紙を読んだ静吾には、いずれはそうした母の思いに応えていかなければならないというこ
とがわからなかったということ。

問4

傍線部C「彼は苦みの濃い満足を味わった」とあるが、このときの「彼」についての説明として最も適当なものを、次の

- ①、⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 16。

- ① 盗んだ炭を抱いて闇の中を走る自分の姿を思い浮かべると、それが醜く滑稽で惨めなものに感じられたが、その一方で、貴重な炭が日頃何一つしてやれない母をせめて喜ばせるものになってくれればと願い、身勝手に満足している。
- ② 盗むという行為が許されないものだということは承知しているが、富める家からの物資の強奪という行為ならば精神的な豊かさを大切にしてきた母の意に添うものであるとも考え、そうした葛藤のなかで一応の充足を感じている。
- ③ わずかな炭を盗んでも何も変わらず、盗みを働く自分の姿は情けないものでしかなかったが、自分の行為が裕福な家を憎む母への孝行にもなると自らに言い聞かせながら、鬱憤をはらしたような気分になり、歪んだ喜びに浸っている。
- ④ ふだん母に対して何もしてやれない自分のことを不甲斐なく思っていたが、母の嫌っている金持ちの家のものを何とか盗むことに成功し、母を喜ばせることができたため、苦々しい後ろめたさとともに満足感も覚えている。
- ⑤ これまで贅沢を忌避しつづけてきた母になんとか報いようと思い、金持ちの家に盗みに入り、それなりの成果を得て満足したものの、その行為が果たして本当に母のためになるのかどうかわからなくなってしまい、混乱に陥っている。

問5

傍線部D「例えば、[〃]いとおいしい[〃]」といった言葉の物柔かな響きを、彼は口の中で繰返して、羞恥の入り混った気の弾みを味わった」とあるが、これについての説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

17。

① 新しい同居人となった安芸子という若い女性は、将来への展望を語ってくれるだけでなく、その語り口の伸びやかさや繊細さ、そして「いとおいしい」という言葉に象徴されるような柔らかさによって、現実を否定的に受けとめがちだった自分に、未来への希望を与えてくれることになった。

② 母は間借り人として安芸子という控えめな女性を選び、彼女は家族と親しくなるにつれ、次第にもの柔らかな雰囲気や醸し出すようになっていったが、そうした若い女性の存在によって、家庭を覆っていた鬱陶しい雰囲気が一掃され、そのことに喜びと感謝の念を抱くようになった。

③ 安芸子を使う「いとおいしい」という言葉を自分に向けられた言葉のように受けとめ、若い女性と親しく接することに胸弾むものを感じつつ、母は別として祖父もまた自分同様に若い女性の華やきに触れることを楽しみにしているのを知って、どこか気恥ずかしいような喜ばしいような気分になった。

④ けっして恵まれてはいない境遇にある点では安芸子も自分も同じだが、彼女はそれでももの言いに柔らかさをもっており、そうした若い女性がやってきたことは、ともすれば暗く沈みがちな家庭に潤いや華やき加わることであるとともに、自分にとって何か照れくさいながら心躍ることもあった。

⑤ 安芸子は必死に生きようとする者を「いとおいしい」とみなしそこに共感の眼差しを向けようとするが、そんな彼女のことを知れば知るほど、自分はもちろん母や祖父までもが安芸子に感化され、互いのうちに巣くっていた不信や反目の芽が拭い去られていくのを感じ、胸をなで下ろすような気持ちになった。

問6 この文章の表現に関する説明として適当なものを、次の①～⑥のうちから二つ選べ。ただし、解答の順序は問わない。

解答番号は

18

19

・

- ① この文章は、「祖父と静吾」「母と静吾」「安芸子と静吾」という「静吾」を軸とした複数のエピソードを描きながら、最終的にはそれらが、「静吾」の不幸な運命を予感させるものとして関連づけられていくという構成をとっている。
- ② この文章では、「静吾」という主人公の内面描写を介し、戦前から戦後にかけてのある家族とそれに関わることになった女性のありようやそれぞれの抱える思いが、重厚な印象を与えるような文体で描き出されている。
- ③ 本文冒頭におかれた回想場面から、「静吾と祖父」の良好な関係が読み取れるのとは対照的に、39行目から40行目の「祖父」の小遣いをめぐるエピソードからは、「母と祖父」の関係がぎくしゃくしたものであることが読み取れる。
- ④ 21行目から24行目で紹介される「母」の葉書や、66行目から80行目に描かれている「安芸子」の発言は、「静吾」の立場に即して描かれているこの作品のなかで、彼女たちの内面の動きを読み取る手がかりとなっている。
- ⑤ 37行目の「豆粕入りの飯に鰯の丸干」、91行目の「鍋のじゃが薯を突ついてみて」など、この作品に食事や料理などに関する具体的な描写部が多いのは、それ以外の箇所の観念性を相対化するための工夫だと言える。
- ⑥ 52行目の「二月、金融緊急措置令による新円の切替えが行われたあと、静吾の家の窮迫は深まった」といった時代年表的な記述からは、この小説が当時の世相を記録する目的で書かれたものだということがうかがえる。

第3問

次の文章は、野村望東尼『夢かぞへ』の一節で、作者が、人から聞いた話を書きとめたものである。徳川家康の家臣、平岩親吉は肥後国熊本藩主の加藤清正を敬愛し、また清正も平岩の人柄を好ましく思っていた。ある時、平岩は、藤の花が美しく咲く自邸に清正を招いたが、清正が訪れる日の朝、家康からの呼び出しを受ける。以下の文章は、それに続くものである。これを読んで、後の問い（問1～6）に答えよ。（配点 50）

大殿より、平岩殿をにはかに召し給ひ、仰せあるには、「汝、清正と兄弟のちぎりをしてむつまじき由、さるによりて、今日そこにあるじする由、われと清正とはいづれを大切に思ふにや」と問はせ給ひし。その御心を、はや、かうよと察せられしかば、色を失ひ、わなわなとふるひて、御受けもはかばかしからざりければ、あたりに居並みたる御心知りの殿たち、「とく御答を」と、せちに言はるれど、なほ汗を流し、消えも入るべきさまなるに、大殿には、「よもわれにはかへまじ。かの清正、世にありては、はた天下をも覆すべし。大坂の方人たれば、わが世を治めむたよりのさまたげなり。されば、惜しき武士ながら、世の治まると治まらぬにはかへがたし。今日この薬の馳走せよ」とて、恐ろしきものを給はりたるに、いよいよ心もとびちるばかり、生きたる心地もなげにふるひわななき、今にも命絶えなむとぞ見えける。されば、大殿仰せて、「かれは病おこりたるなり。はや下城いたさせよ」とあれば、人々とかくして送り帰さるる時、「このまま帰し給ふものならば、必ずこの事を清正に告げて、いよいよ御大事こそ引き出ださめ。打ち果たしてん」など言ひ騒ぐを、さすがにかしこき御心にて、「A いな、さにはあらじ。かれ、心よくうけがひなば、必ずもらすべけれど、かくまで臆してふるひたるは、わが命のそむきがたきを知るなりけり。ことごとなしうるに違はじ」とて、ゆたかに仰せありきとなむ。

されば、平岩殿は館に帰りて、御子何某殿に仰せけるは、「汝、事のわけもなく、腹を切り得るにや」とのたまへば、若殿には、「父の仰せならば、事わかたでもつかうまつらん」と答へ給ひて、御障子をあげ給ひしに、白木の三方に刀をものして、その御まうけしたれば、すぐに立ち寄り、すでに御腹をものせんとせられければ、父君、「しばし」とおしとどめ給ひ、「その心

あらば明かしなむ。今日御召しに参りたるに、かやうかやうと仰せあり。そむけば不忠、また、なしうるには義といふものそむけぬ。この二つ、わが身一つにいかにもわけがたしといへども、君の御大事を(イ)いかでそむきなむや。されば今日のあるじを汝もよくつとめて、清正公とともにかの御薬を食べ侍らんと思ひさだめたれば、その心得せよ」となん聞こえられたりしかば、親の子にておはししにや、うち笑ひつつ、**B**うらなくうけがひ給ひぬる、御心々、あはれとおほかたの事なるべし。

時うつれば御客人渡り給ひ、咲きにほふ藤の下陰などに、限りなき御もてなし、心の香をもにほやかに尽くし給ひ、いつのまにか仰せごとのかしこきものを奉り、みづからにも食べ給ひしか。いかにつれなき武士の道なるらん。御客人には、うらなく興じ給ひつつ、夜に入りて帰らせ給ひしかば、すぐに大殿に上りて、御前に出でられしかば、「いかになし得しならん、汝もともに食べけん」と心を(注5)さして仰せありしかば、「さに侍りたり」とぞ申し上げられたる。さて、「わがため上もなき忠なり。さらばいとほしくも、(ウ)汝は近きにみまかるべし。子なる何某に、いくばくにも望みの国を与へつかはさん」とありければ、平岩殿いたく怒れる面持ちして、「こは仰せごともおぼえ侍らず。いかでわが国富み栄えん事を願ひ奉らん。親子ともにかの品をも食べ侍りつれば、やがてもろともに世を去りぬべし。さりとて、後に家を立てさせられては、清正に義も立ち侍らねば、跡なくなし果てさせ給はるこそ、わが本意なり」と聞こえ奉られたれば、いよいよその心ざしを深くあはれと思ひ、御涙もとどめあへさせ給はず、錦の御袂しぼり給ひしかいふ古事を語るるに、あまりあまりたぐひなき人の心ばせの、めでたうかなしかりしまま、あらまし書いとどめつ。

(注) 1 大殿——徳川家康のこと。

2 大坂の方人——加藤清正が、家康と敵対する豊臣秀頼に心を寄せていることをいう。

3 御子何某殿——平岩の息子。「若殿」とも呼ばれている。

4 三方——檜で作った四角形の盆に、台を取り付けたもの。儀式などの時に物を載せるのに用いる。

5 心をさして——心中を察して、の意。

問1

傍線部(ア)～(ウ)の解釈として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は

20
22。

(ア)

御受けもはかばかしからざりければ

20

- ① お答えもはっきりしなかったので
- ② ご返事もする気になれなかったが
- ③ ご対応も見苦しいものだったため
- ④ お言葉を返すこともできないけれど
- ⑤ ご反応が気に入らなかったため

(イ)

いかでそむきなむや

21

- ① なんとかして助けたいものだよ
- ② どうしても従うべきだろうか
- ③ どうして逆らうことができたのか
- ④ なぜ逃げてしまうことがあるのか
- ⑤ どうやっても逃げられないなあ

(ウ)

汝は近きにみまかるべし

22

- ① お前は死んでも同然だろう
- ② お前は即座に出家をしたらよい
- ③ お前は近く病気になるに違いない
- ④ お前はすぐに退出してもかまわない
- ⑤ お前はまもなく死ぬだろう

問2 波線部 a ～ d の文法的説明の組合せとして正しいものを、次の ① ～ ⑤ のうちから一つ選べ。解答番号は

23。

- | | | | | | | | | |
|---|---|------------|---|-----------|---|-----------|---|------------|
| ① | a | 完了（強意）の助動詞 | b | 格助詞 | c | 形容動詞の活用語尾 | d | 打消の助動詞 |
| ② | a | 打消の助動詞 | b | 形容動詞の活用語尾 | c | 断定の助動詞 | d | 完了（強意）の助動詞 |
| ③ | a | 完了（強意）の助動詞 | b | 断定の助動詞 | c | 形容動詞の活用語尾 | d | 打消の助動詞 |
| ④ | a | 打消の助動詞 | b | 形容動詞の活用語尾 | c | 格助詞 | d | 完了（強意）の助動詞 |
| ⑤ | a | 打消の助動詞 | b | 断定の助動詞 | c | 断定の助動詞 | d | 動詞の活用語尾 |

問3

傍線部A「いな、さにはあらじ」とあるが、ここで家康は家臣の懸念にどのように答えたのか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

24。

- ① 平岩が真っ青になって震えていたのは、敵である清正とひそかに親しくしていたことを自分に知られたからであって、だからこそ、失った信頼を取り戻すため、清正を毒殺するという計画をうまくやってのけるだろう。
- ② 清正は、自分に逆らい再び戦いをしかけようとしているため、天下を安定させるには先に清正の命を奪うしかなく、平岩もそのことを納得したのだから、毒殺がどんなに恐ろしくても、清正に計画を話したりはしないだろう。
- ③ 仮に、清正が平岩のそぶりから何らかの謀略を察知したとしても、兄弟のちぎりまで交わした平岩が清正に危害を加えることまでは考えもしないだろうから、謀略の露見をおそれて平岩を討つ必要はないだろう。
- ④ 平岩が、敬愛する清正を毒殺するよう命じられて気を失いそうなほど震えていたのは、自分の命令に背くことができずもないと平岩自身がわかっていいるからであって、清正に打ち明けたりしないで計画をやり遂げるだろう。
- ⑤ 平岩は、敬愛している清正の命を奪えという自分からの指示を受けて、返事もできず仮病を使って帰って行ったが、たとえば平岩を通じてこのことを知った清正が謀反を起こしても、それを鎮めるのは難しくないだろう。

問4 傍線部B「うらなくうけがひ給ひぬる」とあるが、この部分は誰のどのような様子を描いているか。その説明として最も

適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 25。

- ① 平岩の息子の、武士として守るべき忠義と義理との間で悩みながらも決意して申し出た父の言葉を、心の底から受け入れる様子。
- ② 平岩の息子の、息子を残して死ななければならないという父の苦悩を知り、その苦しみを和らげようと、あえて笑顔で接する様子。
- ③ 平岩の息子の、息子を助けるためには自らを犠牲にしても主君に忠義を示すしかないという父の決心に、しぶしぶ同意する様子。
- ④ 平岩の、息子の日ごろの親孝行な態度から見て、どんなに理不尽であっても息子は自分の言葉に従うだろうと、疑いを持たない様子。
- ⑤ 平岩の、悩み抜いて下した自らの決断を、息子が少し聞いただけですぐに理解したことから、その明敏さに深く満足する様子。

問5

傍線部C「平岩殿いたく怒れる面持ちして」とあるが、平岩が「怒れる面持ち」になったのはなぜか。その理由として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

26。

① 自分は、領地が欲しくて命令に従ったわけではなく、清正よりも家康を大切に思うからこそ清正の命を奪ったのに、家康がどこの国でも与えようと言ったため、自らの利益のためには親友をも裏切る人間だと思われていたのだと知り、長年仕えてきたのに家康に自分のことを少しも理解してもらえていなかったと、情けなく感じたから。

② 自分は、自らの命を絶ったうえ息子をも道連れにして、家そのものを絶やすことで、やむをえず殺すことになった清正への義理を果たすつもりなのに、家康は、自身への忠義を喜び、見返りとして平岩の息子に好きな国を与えるなど口にしたので、自分の苦境と覚悟をまったく理解していないのだとわかったから。

③ 主君である家康への忠義と敬愛する清正への義理との、どちらを選ぶこともできず、結局自らと息子の命を絶つことしかできなかった自分なのに、家康から謝罪の言葉をかけられ、どんな国でも与えると言われたため、その心の広さに感動するとともに、そんな行動しかとれなかった自分のことを愚かだと後悔したから。

④ 自分は、家康によって、兄弟同様に思い心から信頼しあっていた清正を毒殺するという、人の道にはずれたことを強いられ、そのために、自ら死を選ばざるを得ない苛酷な状況に追い込まれているのに、それに対する家康の報奨がたった一国の領地を息子に与えることでしかないのは、あまりに薄情だと思ったから。

⑤ 主君の命令とはいえ、兄弟のちぎりまで交わした清正を自らの手で葬ろうとしていることを情けなく思い、そんな自分の家が続くことは武士としての恥だと考え、自分だけでなく息子の命をも奪い、家を絶やすことを覚悟したのに、家康が、忠義を尽くした臣下を犠牲にするわけにはいかないと、それを許そうとしなかったから。

問6 この文章の表現と内容に関する説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

27。

① 「いかになし得しならん」「いかでわが国富み栄えん事を願ひ奉らん」などと、会話の中に反語表現が用いられることにより、武士が互いに強い表現で自らの主張を伝えようとする様子と、人々が曖昧なものの言い方を許そうとしなかった戦乱の時代の厳しい世相が表されている。

② 清正が平岩の邸に来たときの描写において、「限りなき御もてなし」「かしこきものを奉り」「うらなく興じ給ひつ」などと、平岩自身が清正との最後のひとときを楽しんだ様子が描かれ、そのことによって運命に操られる二人の悲劇がいつそう強調されている。

③ 武士同士の命をかけたやりとりを記す場面においても、「心の香をもにほやかに尽くし給ひ」「錦の御袂しぼり給ひし」などの和歌修辭的な表現が用いられており、戦国の世を生きた武士の中にも、王朝文化に憧れる気持ちが存在していたことが読み取れるようになっている。

④ 「御心々、あはれとおほかたの事なるべし」「めでたうかなしかりし」などと、平岩とその息子に対する作者の感想が差し挟まれることによって、作者が、伝え聞いた彼らの心のありように対し、痛ましく思いつつも感嘆する気持ちを抱いていることが伝わるようになっていく。

⑤ 「さに侍りたり」「こは仰せごととおぼえ侍らず」のように、平岩の発言の中に徹底して家康への敬語が用いられていることで、平岩と家康の間の身分差が際立ち、清正を裏切つてでも家康の命令に従わざるを得なかった平岩の無力感が巧みに描かれている。

第4問

次の文章を読んで、後の問い（問1～7）に答えよ。（設問の都合で返り点・送り仮名を省いたところがある。）
（配点 50）

漢文帝嘗行中渭橋、有三人聞蹕、匿橋下。久以為蹕過、走

出、乘輿馬驚。廷尉張釈之奏、「犯蹕当罰金。」帝怒曰、「頼吾馬

和柔、他馬已傷敗我。廷尉乃罰金耶。」釈之曰、「法者、天子所与

天下公共。且方其時、上使誅之則已。既下廷尉、廷尉天下之平也。

為之輕重、民安所錯手足乎。是法不信於民也。」帝良久曰、「廷

尉当是。」

後有盜高廟坐前玉環。釈之奏、「当棄市。」帝大怒曰、「此人無

道、吾欲族之。君以法奏之、非吾所以恭承宗廟意也。」釈之曰、

「且^{しばら}罪等^{シケレバ}、然^{ラバ}以^テ逆順^ヲ為^ス本^ト。今盗^ミ宗廟^ノ器^ヲ而族^{セバ}之^ヲ、仮^た令^{とヒ}愚人^{取^ルトモ}取^二長陵^一、

一^{いつ}抔^{ぱい}土^ノ、陛^ヲ下^テ何以^{ヘン}加^フ其^ノ法^ヲ乎^ト。」帝^ス許^ス之^ヲ。

(杜佑^{とゆう}『通典^{つてん}』による)

(注)

- 1 漢文帝——前漢の第五代皇帝。前漢創業の皇帝である高祖(劉邦^{りゅうほう})の第二子。
- 2 中渭橋——長安近くを流れる渭水にかかっていた橋。
- 3 蹕——天子の行幸の際に、行列の先頭を行く者。転じて天子の行列自体を指す。
- 4 乘輿——天子の乗った馬車。
- 5 廷尉張釈之——「廷尉」は官職名。裁判・刑罰を掌った。「張釈之」は人名。
- 6 高廟——前漢の高祖(劉邦)を祭るみたまや。
- 7 玉環——玉製の輪で、腰に着ける飾り。祭器の一つ。
- 8 棄市——市場など人の多いところで罪人を死刑にすること。
- 9 族——罪人の父母・妻子にまで刑罰を及ぼす。一族皆殺しの刑罰にする。
- 10 恭承——うやうやしくお仕える。
- 11 宗廟——祖先を祭るみたまや。
- 12 以^レ逆順^ニ為^レ本——ここでは、法の基本として死罪でも不敬の程度によって処罰に差違をつけること。
- 13 取^二長陵一^一抔土——「長陵」は前漢の高祖の陵墓で、その陵墓を荒らすこと。

問1 傍線部(1)「和柔」・(2)「平」の意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。

解答番号は 28 . 29。

(1)

「和柔」

28

- ⑤ 我慢強い
④ おとなしい
③ すばしっこい
② たけだけしい
① 美しい

(2)

「平」

29

- ⑤ 象徴
④ 先駆
③ 基準
② 権勢
① 補佐

問2 傍線部A「上使_レ誅_レ之則已」の解釈として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

30。

- ① 陛下がこの無礼者の処罰を決めた私を殺そうとすれば、今度は陛下自身が裁かれることになります。
- ② 陛下がこの無礼者の処罰を決めた私を殺そうとしても、私は必ずやそれを食い止めるでしょう。
- ③ 陛下がこの無礼者を殺してしまえば、それで陛下の皇帝としての地位は損なわれてしまいます。
- ④ 陛下がこの無礼者を部下に命じて殺させようとしても、その命令はきつと実行されないでしょう。
- ⑤ 陛下がこの無礼者を部下に命じて殺させてしまえば、それでこの者の処分は終わったはずで。

問3 傍線部B「民安所_レ錯_二手足_一乎」とはどういうことか。その内容として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから

一つ選べ。解答番号は 31。

- ① 人々が安心して生活できない。
- ② 人々の生活が貧窮してしまう。
- ③ 人々の憩いの場所がなくなる。
- ④ 人々が犯罪を犯さなくなる。
- ⑤ 人々が安楽に生活できる。

問4 傍線部C「是法不信於民也」の書き下し文として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 解答番

号は 32。

- ① 是れ法民よりも信ぜざるなり
- ② 是れ法民に信ぜられざるなり
- ③ 是れ法民を信ぜざるなり
- ④ 是れ法の信ぜざるは民に於いてするなり
- ⑤ 是れ法の信ぜざるは民に於いてせんや

問5 傍線部D「廷尉当是」とあるが、「漢文帝」が「是」とした「廷尉」の考えとはどういいうものか。その説明として最も

適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 解答番号は 33。

- ① 法の適用については十分慎重になるべきだが、いかなる理由であっても皇帝に対する罪と判断された場合は死刑を免れることはできない。
- ② 法の執行は最終的には皇帝にのみゆだねられているのであり、それだからこそ皇帝にはいつその厳正さがもとめられるのである。
- ③ 法で皇帝が裁くことになるのは民衆なのだから、法の執行者である皇帝が真摯な態度で臨まない限り犯罪が減少することなどありえない。
- ④ 法とは万人すべてに公正に適用されるべきものなのだから、たとえ皇帝であっても法を犯せば法に則して処罰されるのは当然である。
- ⑤ 法とは誰に対しても平等に適用されるものであり、一旦法によって処罰が決定されたならば、たとえ皇帝であっても覆すことはできない。

問6 傍線部E「非_レ吾所以恭承宗廟意也」の返り点の付け方とその読み方として最も適当なものを、次の①～⑤

のうちから一つ選べ。解答番号は 34。

- ① 非_レ吾所以恭承宗廟意也
吾が以て恭承する所に非ざるは宗廟の意なり
- ② 非_レ吾所以恭_三承宗廟_一意也
吾に非ざるは以て宗廟に恭承する所の意なり
- ③ 非_下吾所以恭_三承宗廟_上意也
吾が宗廟に恭承する所以の意に非ざるなり
- ④ 非_三吾所以恭承宗廟_一意也
吾が恭承する所以に非ざるは宗廟の意なり
- ⑤ 非_四吾所以恭_三承宗廟_一意也
吾が宗廟の意に恭承する所以に非ずや

問7

この文章の内容を説明したものととして最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 解答番号は 35。

① 二つの具体的な事例を挙げて「漢文帝」と「廷尉張釈之」の刑罰についての考え方の対立が紹介されているが、どちらの場合も法を判断の根拠とした「廷尉張釈之」の见解が「漢文帝」に受け入れられるという結果となっており、この時代にはたとえ皇帝でも私情に基づく裁定は許されなかったことが示されている。

② 「漢文帝」の身近で起こった二つの犯罪と「廷尉張釈之」の裁定が紹介されているが、どちらの場合も「廷尉張釈之」の裁定は「漢文帝」の意に沿うものではなかったため、「漢文帝」を配慮した裁定が改めて下されるという結果になり、法を左右できる皇帝の権力がいかに大きかったかを強調して述べている。

③ 「漢文帝」自身と「漢文帝」の「宗廟」に関わる二つの事件が紹介され、一旦は私情によって刑を裁定しようとした「漢文帝」がその後寛容な法の執行を望んだものの、「廷尉張釈之」によって法の執行は厳正であるべきだと諫められ、結局は法の規定通りに厳罰に処したことが記され、皇帝と臣下のあるべき関係を論じている。

④ 「漢文帝」と「廷尉張釈之」との間に生じた法解釈をめぐる意見の対立が量刑の判断にまで及び、実際に起こった二つの事件の裁定が大きく隔たるものとなり、法の解釈が立場によって異なるという問題を指摘し、結果として下された量刑が果たして適当なものであったのかどうかについて疑問を呈している。

⑤ 二つの異なった逸話によって「漢文帝」と「廷尉張釈之」との刑罰についての考え方が紹介され、自分の考えよりも「廷尉張釈之」の考えを重んじようとする「漢文帝」と、民に重罰を科したくないと願う「廷尉張釈之」の姿を描くことによって、結局は民の命を尊重する態度こそが平和な世をもたらすものだとし唆している。

